

□海外文献紹介□

潰瘍性大腸炎患者での大腸癌リスクと死亡率

Colorectal cancer risk and mortality in patients with ulcerative colitis: *Lanholz E, et al* (Gastroenterology 103: 1444-1451, 1992)

1962年から1987年の間に診断された1,161人の潰瘍性大腸炎の患者を0～26年の間、平均11.7年経過を追った。うち141人が死亡、26人が潰瘍性大腸炎が原因で死亡した。

診断された最初の1年での死亡リスクは2.4でその後の死亡率は特に高くはなかった。診断後25年での

累積切除率は32.4%で、初めの罹患部位が切除率に特に関連があった。診断から5年以内では、全大腸炎で35%、全大腸ではないがかなり広範な結腸炎では19%、左側大腸炎では9%であった。

観察期間中に6人の患者に大腸癌が起こった。背景人口群での大腸癌発生期待数は6.6で、比較危険度は0.9であった。25年後の累積大腸癌発生率は3.1%、デンマーク人での大腸癌発生率3.7%に対して、潰瘍性大腸炎患者での生涯癌発生率は3.5%であった。つまり比較危険度は0.9で、これまでの定説に比べて低い癌発生率を示した。

これらのことから、積極的な内科的あるいは外科的治療を行えば、大腸が完全なまま残されている患者では決して大腸癌リスクは高くはないことがわかった。この種の報告はほかにもあり、例えばSt. Marks病院の報告では、全大腸炎での癌発生率は15年で3%、20年で5%、25年で9%である。

以上より、潰瘍性大腸炎患者の大腸癌発生リスクは予想されるよりずっと低く、治療によって左右されるところが大きいと考える。

(愛知県がんセンター消化器内科

小林 世美 抄)